



[目次]

男女共同参画学協会連絡会第8回シンポジウム参加報告..... 1
川那部元学会長レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ受勲 3

記 事

I. 全国委員会承認事項 3
II. 書評依頼図書 4
III. 寄贈図書 4
IV. 後援・協賛 5
V. 地区会報告 5

お知らせ

1. 関東地区生態学関係修士論文発表会 12
2. マリンバイオテクノロジー学会大会 13

書評 13

京都大学生態学研究センターニュース 18

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については冊子を必要としない会員への割引(ER 900 円、生態誌 600 円)を行っています。すでに会員の方が今後申請される場合は2012年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200 円 東北地区：800 円 関東地区：600 円 中部地区：0 円
近畿地区：400 円 中国・四国地区：400 円 九州地区：700 円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250

※ お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。

第8回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム「男女共同参画と社会」参加報告

キャリア支援専門委員長 半場祐子

開催日：2010年10月7日（木）

開催地：理化学研究所 和光研究所

参加者：可知直毅、半場祐子

午前の部：10時～11時45分

分科会 A: 学会を含むリーダーシップ活動の機会均等（報告：可知）

世話役：本間美和子（分子生物学会）

2007年に男女共同参画学協会連絡会が実施した大規模アンケート調査によると、女性は男性に比べて教授や研究室長など独立して研究を企画実施するPI（Principal Investigator）になることを躊躇する傾向があることがわかった。女性が指導的立場の研究者キャリアをめざす上でこれまで気づかれていないバリアがあるのだろうか。日本分子生物学会は、2009年の年大会の演題登録時に登録者の属性調査を実施した。その結果、演題登録者の女性比率（24%）は、学会員の女性比率とほぼ同じであるのに対して、シンポジウムオーガナイザー／座長やスピーカーの女性比率（12%）は顕著に低いことがわかった。

そこで、日本植物生理学会、日本神経科学学会、日本発生生物学会、日本遺伝学会などに同様な調査を依頼し分析した。その結果、女性のオーガナイザーが増えると女性のスピーカーも増えるという傾向が認められた。アメリカでも学会賞の選考委員に女性が加わると女性が受賞するようになったということがあるそうだ。これらのデータから「選ぶ側に女性が入ると女性が登用される傾向が高まる」という仮説が想定できる。

アメリカの細胞生物学会では、「Women in Cell Biology」という女性会員からなる組織があり、学会での女性登用のための様々な活動（女性シンポジウムオーガナイザーやスピーカーの推薦、男女共同参画推進に関するラウンドテーブルなど）を行っているそうである。女性研究者が互いに切磋琢磨し指導的なキャリアをめざしていくための仕組みとして、メンター制度など公式なものだけでなく私的なネットワークの重要性を痛感させられた分科会であった。日本語で「コネ」というと裏取引のようなマイナスのニュアンスで使われることも多いが、女性研究者が良い意味での「コネ」をより積極的に活用することは、一部の目立つ女性研究者に登用が集中している現状を考えると、女性登用の裾野を広げるために有効な方法のひとつかもしれない。ちなみに、アメリカ生態学会は2010年10月に女性とマイノリティー研究者の現状に関するウェブアンケート調査を実施した。その結果報告が待たれる。

分科会 B: 女性リーダー育成、若手育成（報告：半場）

世話役：高井まどか（応用物理学会）

企業や研究機関のリーダーとなっている女性10名あまりをコメンテーターとして招き、その体験談を聞きながら女性のリーダー育成はどうあったらよいかを探る、というスタイルであった。若手育成の話はほとんどなく、中堅以上の女性リーダー育成をどのようにしたらよいかという内容であった。学協会としては委員会や理事に女性を加えること、女性間のコミュニケーションの場をつくること、などに取り組むことが必要であるとされた。

分科会 C: 自分自身のシステムを知る—科学が動かす男女共同参画を探る

世話役：跡見順子、富田—横谷香織（宇宙生物学会）

午後の部 13時～17時30分

全体会議（報告：半場）

主催者の栗原先生（高分子学会）より挨拶があり、つづいて合田隆史氏（文科省科学技術学術政策局 局長）、

岡島敦子（内閣府 男女共同参画局局长）の代理の方の挨拶があり、大熊健司氏（理研 横浜研究所所長）より歓迎の辞が述べられた。

合田氏より、男女共同参画は、「若手研究者支援」という枠組みで考えるという方向になりつつあることが紹介された。また、男女共同参画支援室に支援スタッフなどを配置するために予算措置を考えているとのことであった。大熊氏よりは、男女共同参画の本質的な問題解決のためにはワークライフバランスに取り組むことが必要である、また男性女性を問わず多様な生活状況を認め、それぞれのケースに応じてきめ細かく支援していくことが必要ではないか、との話があった。

特別講演として、茅幸二氏（理研スパコン開発本部副本部長）より「予測の時代の科学」と題して次世代スパコンの世界的な位置づけやさまざまな分野への応用の可能性についての話があった。続いて相澤益男氏（総合科学技術会議議員）より、「これからの科学・技術と男女共同参画」と題した講演があり、政府としては「人材の多様性確保」という枠組みの中で男女共同参画を考えており、若手研究者、外国人研究者、女性研究者をあわせて増やしていきたいという方向性であるとのことであった。

14時50分～15時50分

各学会や大学・研究機関での男女共同参画の取り組みについておよそ30件のポスター発表があり、活発な討議が交わされた。

16時～17時30分

「男女共同参画のこれから」と題して各分科会の報告などがなされた。研究者のワークライフバランスWGでは、大規模アンケート調査の結果から、研究者の職場および自宅での仕事時間と、配偶者や子供の有無、性別との関係を解析した結果が報告された。研究者の総仕事時間は1週間あたり平均67時間であり、一般的な労働時間の基準（45時間）と比べると非常に長い。また、男性、女性とも、子供があると職場での仕事時間が短くなり自宅での仕事時間が長くなるが、女性の方がその傾向がはるかに顕著であった。配偶者がいない女性と男性の総仕事時間はほぼ同等であった。この結果から、女性の育児支援をすすめるだけではかえって長時間労働への回帰を招きかねず、ワークライフバランスを適切なものにするためには長時間労働の見直しが必要であることが明らかになった。

17時30分～18時

連絡会活動報告、新規加盟学会紹介等の各種報告および次期連絡会幹事学会（日本宇宙生物科学会／生態工学会）の代表の挨拶があった。

川那部浩哉元学会長レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ受勲

元日本生態学会会長の川那部浩哉先生がフランス共和国よりレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエに叙されることとなり、10月26日にフランス大使公邸で授与式が執り行われました。この叙勲は、先生の永年の生態学における国際的な貢献、また、フランスの昆虫学者ファーブルの業績を日本の博物館で紹介する一連の行事の開催のためにご尽力されたことなど、フランスと日本の博物館の連携・交流に顕著な貢献をなされたことを顕彰するものです。日本生態学会としては、このような名誉に浴された川那部先生に謹んでお祝いを申し上げますと共に、会員のみなさまに広くお知らせいたします。なお、受勲式には、日本生態学会会長の代理として、鷺谷いづみ元会長が出席いたしました。



写真撮影：松本忠夫

記 事

I. 全国委員会承認事項

1. キャリア支援専門委員

(任期：2010.10.1～2012.3.31)

委員長	半場 祐子		
委員	池田 浩明	坂田 剛	
	村岡 裕由	三宅 恵子	
オブザーバー	深谷 肇一	石塚 航	
	飯島 勇人		

2. 次期庶務・会計幹事

(任期：2011.1.1～2012.12.31)

庶務幹事	工藤 岳 (北大)
会計幹事	小泉 逸郎 (北大)

3. 学会賞受賞者の決定

第9回日本生態学会賞

中静 透 (東北大学大学院生命科学研究科)

第4回日本生態学会大島賞

大塚 俊之 (岐阜大学流域圏科学研究センター)
 大手 信人 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
 西廣 淳 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
 野田 隆史 (北海道大学大学院地球環境科学研究院)

第15回日本生態学会宮地賞

天野 達也 (農業環境技術研究所)
 瀧本 岳 (東邦大学理学部)
 三木 健 (国立台湾大学海洋研究所)

4. 大会企画委員

(任期：2010.12.17～2013.3.31)

(運営部会) 川北 篤
 (ポスター部会) 谷 友和 岸田 治

5. 日本生態学会誌編集委員

(任期：2011.1.1～2013.12.31)

委員長	鈴木 英治		
編集幹事	船越 公威	富山 清升	
	川西 基博		
編集委員	池田 浩明	大塚 俊之	
	沖津 進	古賀 庸憲	
	市岡 孝朗	辻 和希	
	中丸 麻由子	小林 剛	
	鎌田 直人	津田 みどり	
	井鷲 裕司	北出 理	
	相場 慎一郎	磯谷 達宏	
	岩本 俊孝	崎尾 均	
	島野 光司	土田 浩治	

永光 輝義 村岡 裕由
和穎 朗太 田中 健太
白川 勝信

6. Ecological Research 編集委員

(任期：2011.1.1～2013.12.31)

Editor-in-Chief 可知 直毅

Managing Editor 鈴木 準一郎

Associate Editors-in-Chief

佐竹 暁子 河田 雅圭
福井 学 久保田 康裕
正木 隆 宮下 直
大手 信人 野田 隆史
寺島 一郎 李 博

Assistant Editor 石井 博

Handling Editors

伴 修平 江口 和洋
原 正利 長谷川 雅美
日野 輝明 半場 祐子
市岡 孝郎 岩田 智也
梶 光一 菊沢 喜八郎
木庭 啓介 工藤 岳
久米 篤 松尾 奈緒子
仲岡 雅裕 大塚 俊之
佐藤 一憲 清和 研二
関島 恒夫 陶山 佳久
瀧本 岳 梅木 清
金子 信博 日浦 勉
藤巻 玲路 高橋 耕一
Rhett D. Harrison Sun-Kee Hong
Bas W. Ibelings David W. Inouye
Kari Klanderud Simon A. Levin
Mathew A. Leibold Mark D. Scheuerell
Erling J. Solberg Janne Sundell
Ping Xie Hoi Sen Yong
Niels.P.R.Anten Yunting Fang
Jan Frouz Andrew Lohrer
Zhijun Ma Ariel Novoplansky
Eun Shik Kim Stephen D. Sebestyen

II. 書評依頼図書 (2010年6月～2010年12月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 佐藤洋一郎・加藤鎌司編著「ムギの自然史一人と自然が育んだムギ農耕」(2010) 416pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8190-4
2. 八田洋章・大村三男編「果物学」(2010) 392pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01877-3
3. 樋口広芳・黒沢玲子編著「カラスの自然史」(2010) 280pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8196-6

4. 石田哉著「日本の動物園」(2010) 254pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060191-7
5. 佐々木猛智著「貝類学」(2010) 386pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060190-0
6. 塚本勝巳編「魚類生態学の基礎」(2010) 320pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1229-3
7. 近藤鍊三著「プラント・オパール図譜—走査型電子顕微鏡による植物ケイ酸体学入門」(2010) 400pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8197-3
8. 多田多恵子著「身近な草木の実とタネハンドブック」(2010) 168pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1075-7
9. 小宮山宏・武内和彦・住明正・花木啓祐・三村信男編「サステイナビリティ学④生態系と自然共生社会」(2010) 214pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-065124-0
10. 文部科学省科学技術・学術審議会資源調査分科会編「新時代の自然史言論 統合管理の方法論」(2010) 256pp. クバプロ ISBN:978-4-87805-112-8
11. いわさゆうこ著・八田洋章監修「どんぐりハンドブック 2010」(2010) 80pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1176-1
12. J. ハート著小沼通二/蛭名邦禎訳「環境問題の数理科学入門」(2010) 300pp. シュプリンガー・ジャパン ISBN:978-4-431-10085-0
13. 北海道大学 CoSTEP 著 鈴木章「ノーベル化学賞への道」(2010) 88pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-7412-8
14. 日本生態学会編「自然再生ハンドブック」(2010) 268pp. 地人書館 ISBN:978-4-8052-0827-4

III. 寄贈図書

1. 「果樹研究報告第11号」(2010) 44pp. 農研機構果樹研究所
2. 「果樹研究所ニュース」(2010) 8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所
3. 「ANNUAL REPORT2009 第20回事業報告書 平成21年度」(2010) 144pp. 財団法人東レ科学振興会
4. 「多摩川第127号」(2010) 12pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
5. 「Marine Geology Map no.69 (CD) SEDIMENTOLOGICAL MAP OF OKI STRAIT」(2010) 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
6. 「うみうし通信 No.68」(2010) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
7. 「SESSILE ORGANISMS27 巻2号」(2010) 124pp. 日本付着生物学会
8. 「第34回2009年度年報」(2010) 362pp. 財団法人鹿島学術振興財団
9. 「藤原科学財団記録(6)」(2010) 194pp. 公益財団法人藤原科学財団
10. 「財団法人下中記念財団2010年報」(2010) 62pp. 財団法人下中記念財団
11. 「高木仁三郎市民科学基金10年のあゆみ」(2010)

- 80pp. 認定 NPO 法人高木仁三郎市民科学基金
12. 「第 33 回山田科学振興財団事業報告書」(2010) 126pp. 財団法人山田科学振興財団
13. 「多摩川 128 号」(2010) 12pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
14. 「稲盛財団 2009 第 25 回京都賞と助成金」(2010) 404pp. 財団法人稲盛財団

IV. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

- 平成 22 年度「女子中高生夏の学校 2010 ～科学・技術者のたまごたちへ～」
期間：平成 22 年 8 月 12 日（木）～ 14 日（土）
会場：国立女性教育会館
- 「生物多様性里山知事サミット」および「生物多様性条約第 10 回締約国会議サイドイベント里山知事サミット」
日時：平成 22 年 10 月 19 日（土）
場所：名古屋駅前ミッドランドホール

V. 地区会活動報告

北海道地区会

- 2009 年度北海道地区大会を開催した。
開催日：2010 年 2 月 20 日（土）
場所：札幌市、北海道大学・低温科学研究所（講堂）
<研究発表会>

【若手研究発表の部】

「南インドレフュージア仮説を支持するツムギアリの系統地理」朝香友紀子（北大・院・環境科学）、東典子（北大・女性研究者支援室）、東正剛（北大・院・環境科学）
「アカネズミのタンニン耐性の地域比較」泉佳代子（北大・院・環境科学）、島田拓哉（森林総研・東北）、齊藤隆（北大・FSC）

「有珠火山の噴気孔域における土壌理化学性と植生の回復」川久保恵理（北大・院・環境科学）、山東豪（北大・院・環境科学）、小川洋平（北大・院・環境科学）、三好裕司（北大・院・環境科学）、春木雅寛（北大・院・環境科学）
「網走地域のキタキツネの食性に関する研究」近藤 慧（東京農業大・生物産業学研究所）、白木彩子（東京農業大・生物産業学研究所）

「有珠火山ジオパーク新旧火口における森林植生および土壌生成」山東豪（北大・院・環境科学）、春木雅寛（北大・院・環境科学）、川久保恵理（北大・院・環境科学）、小川洋平（北大・院・環境科学）、三好 祐司（北大・院・環境科学）

「局所スケールと地域スケールにおけるエゾヤチネズミ個体群の空間的遺伝構造の違い」銭谷純平（北大・院・環境科学）、齊藤隆（北大・FSC）、石橋靖幸（森林総研・北海道）、Anna Pauline de Guia（フィリピン大学）、河合久仁子（北大・FSC）、大西尚樹（森林総研・東北）

「エゾシカ個体群の分布拡大に伴う最近 15 年間での遺伝的構成の変化」竹川聡美（北大・院・環境科学）、永田純子（森林総研）、増田隆一（北大・院・理）、宇野裕之

（道環境科学研究センター）、齊藤隆（北大・FSC）

「小規模分断林におけるエゾリス (*Sciurus vulgaris orientis*) の分布：生息地の面積が重要か質が重要か？」館絢花（北大・院・環境科学）、齊藤隆（北大・院・環境科学）

「北海道東部における絶滅危惧サケ科魚種絶滅危惧種イトウの減少要因と保全への提言」野本和宏（北大・院・環境科学）、小泉逸郎（北大・院・環境科学）、深谷肇一（北大・院・環境科学）、秋葉健司（HuchWorks）、大光明宏武（イトウ生態保全研究ネットワーク）、江戸謙顕（文化庁）、東正剛（北大・院・環境科学）

「釧路湿原大島川周辺におけるエゾシカ生息痕跡の分布特性と時系列的変化」橋田金重（北大・農）、富士田裕子（北大・植物園）、高田雅之（道環研）

「日本太平洋沿岸のイワフジツボ属における個体群動態の地域間比較：季節性とその緯度勾配」深谷肇一（北大・院・環境科学）、堀正和（北大・院・環境科学）、山本智子（北大・院・環境科学）、仲岡雅裕（北大・院・環境科学）、野田隆史（北大・院・環境科学）

「シジウカラ (*Parus major*) の産卵数と育雛数の差が示す生態学的意味」油田照秋（北大・院・環境科学）、齊藤隆（北大・FSC）

【一般公演の部】

「釧路湿原温根内におけるハンノキ林伐採後の植生変容」佐藤雅俊（帯畜大・畜産生命科学）

「札幌市藻岩下で 1972 年から 2009 年までに見られたハイイロマルハナバチの減少とニセハイイロマルハナバチの増加」永光輝義（森林総研・北海道）、渡部美佳（東京農業大学）

<若手研究奨励賞の授与>

若手研究奨励賞の審査を 6 名の審査員で行い、審査の結果、朝香友紀子氏（北大・院・環境科学）、泉佳代子氏（北大・院・環境科学）、深谷肇一氏（北大・院・環境科学）の 3 名に若手研究奨励賞（賞状・副賞一万円）を授与した。

<地区会役員会、総会>

【議題】

- 日本生態学会第 58 回大会（札幌）について
- 2010 年度の北海道地区大会（2011 年春開催予定）について
- 会計報告
- 2009 年度の「北海道若手生態学研究会」を共催し、支援を行った。（2010 年 2 月 27 日（土）～ 28 日（日）
場所：国立日高青少年の家）
- 日本生態学会第 58 回大会（札幌）第 3 回実行委員会が 11 月 16 日（火）午後 1 時から午後 4 時まで北海道大学低温科学研究所、3 階交流ラウンジで開かれた。
託児委託業者、参加登録状況、協賛、プログラムの表紙、会場割り付け、口頭発表ファイル、会場係、アルバイト等について打ち合わせを行った。
- 北海道地区会が同地区会会員向けに「北海道発企画助成」の公募を行った。これは、2011 年 3 月に開催される第 58 回日本生態学会大会札幌大会において、北海道地区会会員が企画する大会シンポジウム

に対し、シンポジウム講演者として海外から研究者を招聘する際の旅費を援助する、というものである。2010年7月1日の締切までに3件の応募があり、地区役員による審査の結果、3件とも採用することを内定した。詳細については次回報告する。

東北地区会

(1) 東北地区会第54回大会を開催

開催日：2009年12月19・20日

会場：東北大学川渡共同セミナーセンター

【シンポジウム】(12月19日)

「持続可能な森林管理・林業経営に森林生態学はどう貢献できるのか？」

趣旨説明：清和研二（東北大・農）

「植物間相互作用からみた森林施業」八木貴信（森林総研東北）

「ブナ林の豊凶現象とその施業」小山浩正（山形大・農）

「森林の病虫害外防除と森林生態系管理」斎藤正一（山形県森林研究研修センター）

「カラマツ人工林を舞台とした広葉樹林施業の試み—ウダイカンバを中心に」杉田久志（森林総研東北）

「遺伝的地域特性に配慮した森林管理」陶山佳久（東北大・農）

「文化という観点から見た森林の価値」蒔田明史（秋田県立大・生物資源）

【一般講演】(12月20日)

「ブナ当年生実生の胚軸における抗菌物質の組織内分布」○市原優（森林総研東北）、山路恵子（筑波大院・生命環境）

「ブナの開花頻度に個体差が生じるメカニズム—豊作年以外の開花はなぜ起こるのか—」○須藤泰典（山形大・農）、小山浩正（山形大・農）、高橋教夫（山形大・農）

「鳥取県大山ブナ林の森林群集における林冠攪乱に対する感受性の多様性と空間構造との関連性の検討」○鳥丸猛（弘前大・農生）、西村尚之（名古屋産業大・環境情報ビジネス）、松井淳（奈良教育大・生物）、原登志彦（北大・低温研）、山本進一（名古屋大・生命農）

「Boreal fir regeneration and the importance of microhabitats」○Cornman Ari, Makita Akifumi, Shimotani Takuya (Akita Prefectural University)

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「Boreal fir regeneration and the importance of microhabitats」○Cornman Ari, Makita Akifumi, Shimotani Takuya (Akita Prefectural University)

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

「トウダイグサ属植物の杯状花序に見られる多回型の同調的雌雄異熟性」○黒沢高秀（福島大・共生システム理工）

を発送した（宮城県）。

3) 2009年12月 第54回地区大会プログラムをメールで配信した（宮城県）

4) 2009年12月19日 東北大学川渡共同セミナーセンターにおいて地区委員会を開催した。

5) 2009年12月19・20日の両日にわたって、東北大学川渡共同セミナーセンターにおいて第54回地区大会および総会を開催した。

・会計報告

2008年度決算報告とその会計監査報告、2009年度中間報告ならびに今後の執行見込みについて報告があり、了承された。

・その他

2009年生態学会全国大会について 牧陽之助大会実行委員長から終了の報告があった。

○審議事項

・2010年度予算

2010年度予算案について説明があり、了承された。

・各委員推薦

会計幹事に星崎和彦氏（秋田県立大学）、選挙管理委員に鹿野秀一氏・鈴木孝男氏（東北大学）を推薦し、承認された。

・次回・次々回大会について

次回地区大会を秋田県で行うことが報告された。

次々回地区大会は、山形県での開催の了承を得た。

なお、2009年に岩手県で全国大会が開催されたため、地区大会の開催を1巡スキップすることが確認され、了承された。

・その他

地区大会の活性化について議論され、開催方法・開催時期等の検討を含め、活性化する努力を行って行くことが確認された。

(3) 総会

2009年度東北地区総会は、2009年12月20日に開催され、総会議長に牧陽之助氏を選出し、以下の議題について報告および審議がなされた。

・地区委員会における庶務報告・会計報告が了承された。

・2010年度予算案が原案の通り承認された。

・次回地区大会を秋田県で開催することが承認された。

関東地区会

2010年（1月～12月）活動報告

(1) 2009年12月25日に地区会報第58号を発行した（会員配布は2010年1月）。

【特集1】2009年関東地区会公開シンポジウム「若手研究者が描く生態学の未来像」

「鳥の行動生態学的アプローチから：シジュウカラのひなの行動研究」田中啓太（理研・脳科学セ）

「異なる分野をつなぐ：社会性昆虫の進化的研究と今後の生態学」土畑重人（東大・総合文化）

「マルカメムシ類と腸内共生細菌イシカワエラ：内部共生研究の新しいモデル共生系」細川貴弘（産総研・ゲノムファクトリー）

「植物の系統地理学的アプローチから：日本列島の温帯

林構成樹種についての分子系統地理学的研究」岩崎貴也ら（首都大・牧野標本館）

「過去の情報を用いた生物保全へのアプローチ：北米北西部の半自然草原」富松裕（東北大・生命）

【特集2】誌上シンポジウム「伊豆諸島および伊豆半島の動物の分子系統地理学と生活史変異」

「はじめに島ありき—伊豆・小笠原弧の生物地理と生物群集形成史—」長谷川雅美（東邦大・理）

「伊豆諸島におけるシマヘビの系統地理と形態変化」栗山武夫ら（東邦大・理）

「伊豆諸島におけるアカネズミの分布と集団遺伝構造」武智玲奈ら（首都大・理工）

「伊豆諸島および伊豆半島におけるシモダマイマイの生態的・遺伝的変異」林守人ら（東北大・生命科学）

「オカダトカゲの分布とその起源—伊豆半島に乗ってきたトカゲ—」岡本卓ら（国立環境研・環境リスク研究セ）

「伊豆半島周辺におけるカワトンボ属2種の交雑由来集団」林文男ら（首都大・理工）

コメント「鳥類系統地理から見た伊豆諸島のおもしろさと鳥の生物進化学のこれから」西海功（国立科博・動物）

コメントにかえて「伊豆諸島のクワガタムシ相の特徴とその起源、他の分類群との比較」荒谷邦雄（九大・比較社会文化）

地区会活動記録およびお知らせ

(2) 2010年に地区会のウェブサイトを開設した。

URL：<http://www.esj-k.jp/>

(3) 地区会のウェブサイトから地区会報をPDFファイルとしてダウンロードできるようにするとともにシンポジウム開催などの連絡を電子メールで行うこととした。これに伴い、希望する会員のみで冊子体の地区会報の送付およびはがきによる連絡を行なうこととした。

(4) 2010年2月27日（土）に第30回修士論文発表会を首都大学東京国際交流会館にて開催した。

A会場

「クローナル植物 *Glechoma hederacea* の成長に水、栄養塩および光の空間分布が及ぼす影響の実験生態学的解析」張替鷹介（首都大・理工・植物生態）

「栄養塩の空間分布様式がクローナル植物カキドオシの個体間相互作用に与える影響」松嶋麻由子（首都大・理工・植物生態）

「環孔材樹種ミズナラと散孔材樹種ブナの水分利用特性の比較」小宮英之（東邦大・理・植物生態）

「富士山北西斜面雪崩跡地周縁部におけるミネヤナギの定着様式と樹木限界の動態」滝島啓介（首都大・都市環境・地理）

「多摩丘陵の里山林における管理と微地形が林床植生に及ぼす影響」長尾圭祐（明治大・農・応用植物生態）

「大山隠岐国立公園奥大山地区を事例とした自然公園の植生計画の策定手法の検討」千布拓生（鳥取大・農・生態工学）

「植物の近隣個体間でみられる自己・非自己認識の仕組みと影響の実験生態学的検討」水谷紘菜（首都大・理工・植物生態）

「温帯性木本ツルの宿主植生構造に対する可塑的反応」中村満理恵（宇都宮大・農・植物生産）

「富士山火山荒原の先駆植物に対するアーバスキュラー菌根菌の共生効果」中島迪子（東大・農学生命・森林植物）

「中部ルソン島、パイタン湖南岸の湖底堆積物に記録された過去およそ2,460年間の植物珪酸体群の変遷」吉田真弥（専修大・文・地理）

「栃木県太平洋側低地ブナ集団におけるユビキタスジェノタイプピングの試みと保全生物学的意義」稲永路子（宇都宮大・農・資源植物）

「小笠原諸島父島の植栽されたセンダンによる攪乱の検討」須貝杏子（首都大・理工・植物系統分類）

「ベニシダ類の無配生殖型と有性生殖型の混生集団における細胞学的・遺伝学的解析」山本薫（首都大・理工・植物系統分類）

「無融合生殖種ニガナの遺伝的多様性の解析」中川さやか（東大・総合文化・広域システム）

誌として報告書を発行し、生態学会第57回大会(東京)の会場で希望する大会参加者に配布した。

- (6) 2011年1月に地区会事務局を首都大学東京からつくばに移転する(新地区会長:竹中明夫)。

中部地区会

- (1) 2009年度生態学会中部地区会を開催

開催日:2009年12月5日(日)

場所:静岡大学 大学会館

【総会】

1. 2008年度 大会引き継ぎ報告
2. 2009年度 静岡、霧ヶ峰自然保護センター大会報告
3. 2010年度 活動計画
4. 会計報告
5. 中部地区国際学術発表助成費規則改定案
6. 自然保護専門委員推薦2名
井田秀行(信州大・教育)
和田直也(富山大・極東地域)
7. その他
中部地区会としてのポスター賞について、総会にて承認された。来年の地区会からポスター賞が設けられることになった。
以上の件について審議のうえ、了承された。

【研究発表】

「ロジスティック曲線を用いたハイマツ当年枝の成長解析」阿部倫也、鈴木耕史(富山大・理)・和田直也(富山大・極東地域研究セ)

「オープントップチャンバーを用いた環境変化が高山植物の葉形質に及ぼす影響 —中国長白山におけるチョウノスケソウを例に—」金紅蘭(富山大・院・理工学教育)、和田直也(富山大・極東地域研究セ)、李雪峰(中国科学院応用生態研)、蒲池浩之(富山大・院・理工学研究)、韓士杰(中国科学院応用生態研)

「高山植生長期モニタリングの試行調査と種数-面積関係 —立山と中国長白山を例に—」小野弘貴(富山大・理)、和田直也(富山大・極東地域研究セ)、成田憲二(秋田大・教育文化)、李雪峰・韓士杰(中国科学院応用生態研)、劉琪璟(北京林業大)

「岐阜県東濃地方におけるヒメタイコウチ(*Nepa hoffmanni*)の生育環境に関するHSIモデルの構築」中村早耶香、南基泰(中部大・院・応用生物)

「アカネズミのミトコンドリアDNAハプロタイプの多様性が高い植生について」大塚祐貴、白子智康、南基泰、上野薫(中部大・応用生物)

「愛知県弥勒山における*Apodemus*属2種のミトコンドリアDNAハプロタイプの多様性について」白子智康、大塚祐貴、上野薫、南基泰(中部大・応用生物)

「中部大学『あいち森と緑づくりモデル事業』の概要と活用法」加藤聡美、鈴木悠介、愛知真木子、上野薫、南基泰(中部大・応用生物)

「南アルプス南部、赤石岳北西斜面における植物群落の成立過程と斜面発達史」菅澤雄大(静岡大・院・理)、小山拓志(明治大・院・文)、青山雅史(日本地図セ)、

増沢武弘(静岡大・理)

「南アルプス北岳における石灰岩地の植物群落」安部壮一(静岡大・院・理)、増沢武弘(静岡大・理)

「富士山南東面の落葉広葉樹林」伊藤大将(静岡大・院・理)、増沢武弘(静岡大・理)

「富士山の森林限界の動態と菌根菌」大石このみ(静岡大・院・理)、崎尾均(新潟大・農)、藤吉正明(東海大・教)、増沢武弘(静岡大・理)

「静岡県安倍川における外来雑草ネズミムギのエンドファイト感染率と垂直伝播効率」戸村和貴、丸山啓輔、山下雅幸、澤田均(静岡大・農)

「多様性の高い農地ランドスケープは種子食動物による“雑草防除サービス”を高める」市原実・丸山啓輔・山下雅幸、澤田均(静岡大・農)

「草刈り強度を弱めると水田畦畔植生の多様性は高まるか? —伝統的棚田と大規模水田の比較—」丹野夕輝、市原実、山下雅幸、澤田均(静岡大・農)

「外来雑草ネズミムギの発芽動態のHydrothermal timeモデル」足立行徳、山下雅幸、澤田均(静岡大・農)

「コムギ畑に生息する種子食昆虫はエンドファイトに感染した外来雑草ネズミムギの種子を忌避する」丸山啓輔、戸村和貴、市原実、山下雅幸、澤田均(静岡大・農)

「陸ガニによる種子散布量の定量化」伊藤信一、小南陽亮(静岡大・教育)

「多肉果における果皮による発芽抑制の効果」田川千穂(静岡大・院・教育)、小南陽亮(静岡大・教育)

- (2) 2010年度生態学会中部地区会を開催

開催日:2010年12月11日(日)

場所:静岡大学 理学部B棟大会議室

【総会】

1. 第9回富士学会秋季学術大会の共催報告
2. 日本生態学会生態系管理委員会の自然再生講習会の共催報告
3. 本年度から開始するポスター賞の説明
4. 2011年度 活動計画
5. 会計報告
6. 中部地区国際学術発表助成費規則改定案
7. 平成24年度全国大会, 中部地区について
8. ユネスコ エコパークについて

【研究発表】

「岐阜県野麦峠ミズナラ優占林に同所的に生息するネズミ科3種の個体変動について」平下義人、石黒有美、白子智康、上野薫、南基泰(中部大・応用生物・環境生物科学)

「岐阜県高根町野麦におけるネズミ科3種の糞中植物残渣DNAを用いた餌植物の同定」白子智康、上野薫、南基泰(中部大・院・応用生物)

「愛知県弥勒山における*Apodemus*属2種のミトコンドリアDNAハプロタイプの多様性について」石澤祐介、白子智康、上野薫、南基泰(中部大・応用生物・環境生物科学)

「チベット南東部における氷河周辺部の植生と土壌物理化学性の関係」佐藤淳平、上野薫、南基泰(中部大・院・応用生物)

「下層植生を考慮したアカネズミの HSI モデルの構築」吉田考志、大畑直史、愛知真木子、寺井久慈、南基泰、上野薫（中部大・院・応用生物学）、小田原卓郎、那須守、横田樹広、米村惣太郎（清水建設・技術研究所）

「土岐川・庄内川源流 森の健康診断 5 年間の結果」前田大樹、上野薫、愛知真木子、杉井俊夫、南基泰、寺井久慈（中部大・応用生物・環境生物科学）、服部重昭（名古屋大・生命農学）

「同所的林床に生育するイワガラミ・ツルアジサイの直立茎の分布と微環境」森戸寛（岐阜大・院・応用生物）、加藤正吾（岐阜大・応用生物）、花岡創（森林総研・林木育種セ）、小見山章（岐阜大・院・応用生物）

「カラマツソウ属における花粉異形性の有無」古川桂子、佐藤利幸（信州大・工学系研究科・地球生物圏科学）

「ハイマツの当年枝伸長成長と融雪時期との関係」横山将大（富山大・院・理工学教育）、和田直也（富山大・極東地域研セ）

「標高の異なるハイマツ群落における中型土壤動物相の変化」松島綾子（富山大・院・理工学教育）、和田直也（富山大・極東地域研セ）

「立山室堂平における雪田植生の構造と融雪時期との関係」鈴木智博（富山大・理）、初鹿宏壮（富山県環境科学センター）、飯田肇（立山カルデラ砂防博）、川田邦夫（富山大・名誉教授）、和田直也（富山大・極東地域研）

「インターバルカメラを用いた高山植物の開花フェノロジー観察」浦野智裕（富山大・理）、和田直也（富山大・極東地域研）

「南アルプス南部、赤石岳北西斜面における植物群落の成立過程と地形の形成時期」菅澤雄大（静岡大・院・理）、増沢武弘（静岡大・理）

「霧ヶ峰におけるニコウキスゲ個体群の構造」丹羽春菜（静岡大・理）、大石このみ（静岡大・院・理）、増沢武弘（静岡大・理）

「南アルプス北岳の土壤環境と植物の適応現象」安部壮一（静岡大・院・理）、増沢武弘（静岡大・理）

「富士山のブナ ～アザミ塚の大径木群落の形成過程～」伊藤大将、菅澤雄大（静岡大・院・理）、由比将雄（明治大学付属中高）、増沢武弘（静岡大・理）

「富士山南東斜面の森林限界 —30 年間の動態—」大石このみ（静岡大・院・理）、崎尾均（新潟大・農）、増沢武弘（静岡大・理）

「南アルプス石灰岩地の植物 —キタダケソウの生理生態—」青島佑太、増沢武弘（静岡大・理）

「カラマツ実生の定着・生存 —富士山南東斜面の森林限界—」氏良真知子（静岡大・理）、大石このみ、伊藤大将、見上賢吾（静岡大・院・理）、増沢武弘（静岡大・理）

「本州中部高山帯に生育する高山植物の形態的特性」望月大輝、増沢武弘（静岡大・理）

「富士山・伊豆半島・伊豆大島におけるイタドリとススキの分類地理学的研究」富田美紀、徳岡 徹、吉永光一、増沢武弘（静岡大・理）

「静岡県内における外来雑草ネズミムギの発芽特性の集団間変異」足立行徳（岐阜大・院・連農、静岡大・農）、山下雅幸、澤田 均（静岡大・農）

「土着天敵コモリグモは田植え前のレンゲ植生で増加する」山口翔、水元駿輔、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、松野和夫、稲垣栄洋、市原実、済木千恵子（静岡農林研）

「アカスジカスミカメはエンドファイト感染ネズミムギを忌避するか？」水元駿輔、山口翔、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、松野和夫、市原実、稲垣栄洋（静岡農研）、柴卓也、菅原幸哉（畜産草地研）

「静岡県中遠地域で耕地雑草化したネズミムギの DNA 多型」池田六洋、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）、飛奈宏幸（東北農研センター）

「静岡県安倍川に侵入したネズミムギのエンドファイト感染：種子捕食への影響」戸村和貴、内田智、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）

「棚田畦畔の高い種多様性は、生育地の不均質性と不連続性に起因するか？」丹野夕輝、山下雅幸、澤田均（静岡大・農）

「温帯海岸林の林床における陸ガニによる実生の捕食」伊藤信一、小南陽亮（静岡大・教育）

「アジサイ科の生殖器官の解剖学とその意味」町田由、徳岡徹（静岡大・理・生物科学）

「ツツジ科シャクジョウソウ亜科の系統分類学」見上賢吾、徳岡徹（静岡大・理・生物科学）

「DNA 塩基配列を用いたカタバミ目の系統解析」友野拓真、徳岡徹（静岡大・理・生物科学）

(3) 中部地区会共催の学会他

- 1) 第 9 回富士学会秋季学術大会を共催
開催日：2010 年 10 月 16 日（土）17 日（日）
場所：静岡県静岡市葵区御幸町 3 番地の 21 ペガサート 6 階（B-nest）
- 2) 日本生態学会生態系管理委員会の自然再生講習会を共催
開催日：2010 年 12 月 5 日（日）
場所：静岡県静岡市葵区鷹匠 3-6-1 静岡県総合研修所もくせい会館「富士ホール」

近畿地区会

- (1) 臨時地区委員会（持ち回り審議）
日時：2010 年 4 月 12 日（月）
議事：「生物多様性第 10 回締約国際会議に合わせて、生物多様性の理解のための一般向け講演会」への近畿地区会としての協賛
- (2) 2010 年度第 1 回地区委員会の開催
日時：2010 年 6 月 12 日（土）
会場：奈良女子大学
議事：(1) 2010 年度事業計画：フィールドシンポ、公募シンポの募集、第 2 回地区例会 (2) 2009 年度会計報告と 2010 年度会計予算案 (3) 近畿地区会会則・奨励賞細則の改訂 (4) 地区会委員（1 名）の交代 (5) 地区会選出の日本生態学会自然保護専門委員の選出 (6) 近畿地区会第 10 回奨励賞の選考
- (3) 2010 年度近畿地区会総会
日時：2010 年 6 月 12 日（土）
会場：奈良女子大学
議事：(1) 2010 年度事業計画 (2) 2009 年度会計報

告と2010年度会計予算案 (3) 近畿地区会会則・奨励賞細則の改訂 (4) 地区会委員(1名)の交代 (5) 地区会選出の日本生態学会自然保護専門委員の選出

(4) 2010年度第1回例会の開催

日時: 2010年6月12日(土)

会場: 奈良女子大学

第9回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(中島啓裕氏、京極大助氏)

<一般発表>

「カシノナガキタイムシの共生菌伝搬機構」遠藤力也、二井一禎(京大院・農)

「熱帯低地林樹木の共存機構—生活環を通じた空間解析によるニッチ分化の評価—」青柳亮太(京大・生態研)、北山兼弘(京大院・農)

「希少カニ類シオマネキの地域集団間の遺伝的変異と生態的変異」青木美鈴、渡辺陽子、和田恵次(奈良女大・理)

「種内コミュニケーションに音声を利用しないマダガスカルのカゲ類2種による鳥類警戒声の盗聴」伊藤亮、森哲(京大・動物行動)

「生物の環境変化による環境制御とレジームシフト—微生物—pH相互作用系の数理モデル」瀬戸蘭美(奈良女大・理)、巖佐庸(九大・理)

(5) 2010年度第1回フィールドシンポジウムの開催

テーマ「和歌浦干潟にみられる最近の生物の変調」

日時: 2010年8月21日(土)

場所: 和歌山市和歌浦干潟(観海閣周辺)(和歌山県公館)

内容: 午前中現地視察。午後、古賀庸憲氏によるアサリやイボキサゴなどの底生動物の生息量の最近の変化が解説され、続いて大島麻里氏により、和歌浦を基産地とする稀少巻貝ワカウラツボの最近10年間の生息量変遷の発表がされ、質疑応答がなされた。参加者: 講師2名、公募11名、事務局2名の計15名。

(6) 2010年度近畿地区会「公募シンポジウム・研究集会」の選考

表記シンポジウム・研究集会の募集を6月25日~7月31日に行い、応募3件について審査委員会による審査の後、近畿地区委員会に審査結果を諮り、9月13日付けで3件への助成が承認された。

(7) 日本生態学会近畿地区会自然保護専門委員会2010年度委員会の開催

日時: 2010年11月20日

会場: 京都大学

議事: (1) 天然記念物深泥池生物群集の管理に関する京都市宛要望書の提出 (2) 2011~2012年度委員の選任 (3) 生態学会札幌大会での企画集会の開催

(8) 2010年度第2回地区委員会・例会の開催(予定)

日時: 2010年12月11日(土)

会場: 大阪市立大学

プログラム

地区委員会

第10回日本生態学会近畿地区会奨励賞授賞式(遠藤力也氏・伊藤亮氏)

一般発表(未定)

中国四国地区会

(1) 第54回中国四国地区大会(2009年5月15・16日、於: 山口大学)

【ポスター発表】(5月15日)

「可変性二年草ハマサジの繁殖と河岸形状の関係」○荒木悟、國井秀伸(島根大学・汽水域研究センター)

「鳥取砂丘内の植生分布と実生の成長」○永松大、満吉花美(鳥取大・地域・地域環境)

「植物社会学的植生図を用いた広島県宮島のアカマツ二次林の過去35年間の植生変化」○谷川照樹¹、向井誠二²、豊原源太郎³、坪田博美^{1,2}(¹広島大・院・理・生物科学、²広島大・院・理・宮島自然植物実験所、³元広島大・院・理・宮島自然植物実験所)

「コシダ・ウラジロの繁茂が森林遷移に与える影響—広島県宮島におけるコシダ・ウラジロはぎ取り実験中間報告」○坪田博美^{1,2}、向井誠二¹、黒田有寿茂^{3,4}、長谷信二⁵、豊原源太郎⁶(¹広島大・院・理・宮島自然植物実験所、²広島大・院・理・生物科学、³兵庫県大・自然研、⁴兵庫県博、⁵呉市焼山、⁶元広島大・院・理・宮島自然植物実験所)

「岡山県南部におけるため池の水生植物群落—花崗岩地と堆積岩地の比較」○時光秀彰¹、波田善夫²(¹岡山理科大・院・総情・生地、²岡山理科大・総情・生地)

「岡山城内堀の水換えによるアオコ発生に対する影響」○足立良介¹、井上宏和¹、仙頭直樹²、末続厚志¹、齋藤達昭²(¹岡山理科大・院・理・総合理学、²岡山理科大・理・基礎理)

「中山間地の棚田周辺に成立する植生と半自然草地植生の比較」○世木田和也、石川愼吾(高知大・院・総合人間自然科学・理)

「湿地生絶滅危惧植物マルバノサトウガラシの生態学的特性」○細川雅代、平野美奈子、石川愼吾(高知大・院・総合人間自然科学・理)

「日本における最終氷期最盛期以降の火事レジームの変化」○三宅尚、渡久山長作、中川起(高知大・理)

「四国地域におけるコアジサシの繁殖地の分布と環境特性」○佐藤重穂(森林総研・四国支所)

「窒素降下物と降水量はモンゴル草原の生産量にどう影響するか?」○衣笠利彦¹、篠田雅人²、恒川篤史²(¹鳥取大・農、²鳥取大・乾地研)

「内モンゴルにおける2種の緑化灌木 *Salix psammophila* と *Caragana korshinskii* のCO₂固定量」岩本紗弥^{1,2}、○田中晴飛¹、原鋭次郎³、増田達志⁴、衣笠利彦¹(¹鳥取大・農、²兵庫県立大・緑環境景観マネジメント、³(社)地球緑化クラブ、⁴環境NGOエコスタイル・ネット)

「モンゴル草原における車両の轍による植生攪乱と自然回復」○鈴木幸恵¹、土橋法子¹、Nachinshonhor G. U.²、衣笠利彦¹(¹鳥取大・農、²地球研)

「モンゴル乾燥草原における埋土種子集団の垂直構造およびそれに対する車両の影響」○小田祥三、衣笠利彦(鳥取大・農)

【口頭発表】(5月16日)

「高知県中部の河川・水路における水生植物の分布と環境要因との関連性」○山ノ内崇志、石川慎吾（高知大・院・総合人間自然科学・理）

「四国山地剣山系におけるミヤマクマザサ群落の衰退と防鹿柵の効果」○石川慎吾¹、久住稔¹、坂本彰²（¹高知大・理、²三嶺の森をまもるみんなの会）

「JaSPa システムとは何か？—中四国の日本海—瀬戸内海—太平洋縦断ベルト地帯が有す特異な生態系とその活用」○小林剛（香川大・農）

「東南アジアの熱帯林で見られる一斉結実は本当に有利なのか！？」○山田俊弘¹、鈴木英治²、ズイデマピーター³（¹広島大・総科、²鹿児島大・理、³ユトレヒト大・理）

「土佐湾の細砂底に生息するコブシガニ類の生態」○伊谷行、荒井督司、森永純一、山田ちはる（高知大・教育）

「上関原子力発電所予定地の生物多様性と三学会からの要望書」○安溪遊地¹、金井塚務²、安溪貴子³（¹山口県立大・国際文化、²広島フィールド博物館、³山口大・医・非常勤）

【高校生研究発表】（5月16日）

【公開シンポジウム】（5月16日）

【総会】（5月16日）

都合により総会は開催されず、後日メール審議とした。
以下、役員会（5月15日）議事。

a. 報告事項

地区会長選挙報告

中越信和氏（広島大学）選出

庶務報告

地区会員の動向（2010年4月末現在321名、昨年度+8名）、会費納入率、活動報告

会計報告 2009年度会計

各種委員会報告

b. 承認事項

2009年度会計決算

2011年度合同支部大会開催地：香川大学

c. 審議事項

2009年度会計予算

2011年度合同支部大会開催地：香川

次次期地区会の開催方式と時期：メール審議

特別会計からの補助金支出の申請と承認

その他（地区会ホームページ担当、編集）

九州地区会

(1) 2009年度地区委員会

2009年5月23日（土）宮崎大学木花キャンパス

(2) 地区大会

第54回三学会九州支部・地区合同大会

会期：2009年5月23日（土）～24日（日）

会場：宮崎大学木花キャンパス

【一般講演】

「えびの高原におけるオスジカによるアカマツへの剥皮」* 矢部恒晶（森林総研・九州）、岩船昌起（志学館大・人間関係）、柳田蓉子（環境省えびの自然保護官事務所）
「巣箱と自動撮影カメラを組み合わせて樹上性の希少哺乳類を調査する」* 安田雅俊（森林総研九州）、栗原智

昭（MUZINA Press）

「熊本県五家荘と内大臣における巣箱によるニホンモモンガの生息確認」* 坂田拓司（熊本野生生物研究会・千原台高校）、中園敏之（〃・（株）九州自然環境研究所）、歌岡宏信（〃・真和高校）、田上弘隆（〃・開新高校）、天野守哉（〃・熊本西高校）

「テンの糞分布からみた大規模工事による生息状況の変化」* 荒井秋晴（九歯大・総合教育）、足立高行、桑原佳子（応用生態研）、田悟和巳、中村匡聡、松村弘（いであ株式会社）

「熊本県で見つかったクロホオヒゲコウモリ *Myotis pruinosus* について」* 船越公威（鹿児島国際大・国際文化）、坂田拓司（熊本市立千原台高校）、河合久仁子（国立科博・動物研）、荒井秋晴（九歯大・総合教育）

「鹿児島大学構内におけるヒヨドリの秋季の渡りの観察」* 平田令子、平井周作（鹿大・院・農）、畑邦彦、曾根晃一（鹿大・農）

「ソウシチョウとウグイスにおける見かけの競争」* 江口和洋（九大院・理・生物）、天野一葉（バードリサーチ）

「緑色が俺を引き立たせる？～オオニワシドリにおける色彩選好～」* 春山菜央子（九大院・システム生命）、江口和洋（九大院・理・生物）

「枇榔島周辺に生息するカンムリウミスズメについて」* 中村豊（宮大・フロンティア生物資源）

「宮崎県日南市に生息するオキナワキノボリトカゲの調査報告」* 石橋葵¹、河野慎也²、那須哲夫¹、岩本俊孝²（¹宮大・農・獣医、²宮大・教育文化）

「北陸地域のタナゴ類とイシガイ類の分布と産卵床としての利用」* 稲留陽尉（鹿大院・水産）、山本智子（鹿大・水産）

「対応型船底塗料の生物付着防止効果」* 森敬介（九大・理・臨海）

「西表島におけるマングローブの概日時計と湛水ストレス耐性研究」* 渡辺信（琉球大学・熱帯生物圏研究センター・西表研究施設）

「国東半島県立自然公園における低地・丘陵地の自然植生」* 須股博信（大分）

「山地溪流における針葉樹および広葉樹の落葉の分解様式」* 高木正博、手柴瑞代（宮大・農）

「長崎県大村湾における海草の分布と生態」* 中西弘樹（長崎大・教育・生物）、吉岡一也（長崎日本大学高校）

「在来野草チガヤの採種方法の検討」* 吉原光彩、西脇亜也、槐島芳徳（宮大・農）

「4種類の発芽試験法による品質評価法の検討」* 日高悠希、西脇亜也（宮大院・農）

「栽培ダイコンの品種による遺伝子多様度の違いについて」* 松浦宏哉、西脇亜也（宮大院・農）

「在来タンポポと雑種タンポポの間で新たに雑種が生じているか？」* 満行知花（九大・システム生命・生態研）、矢原徹一（九大院・理・生態研）

「マングローブの1種オヒルギの遺伝的多様性と地域分布」遠藤美佳、* 美濃部純子、小泉修、山崎常行（福岡女子大学・人間環境）

【特別講演】

「二、三の日本在来野生植物における遺伝形質の多様性とその地理的分布」明石良（宮崎大・フロンティア科学実験総合センター）

(3) 地区例会

第472回 5月30日（土）沖縄（名桜大学学生会館）

【シンポジウム】

「オキナワトゲネズミ *Tokudaia muenninki* ～アージの暮らせる森づくりに向けて～」

1. 趣旨説明

小高信彦（森林総合研究所九州支所）

2. オキナワトゲネズミ再発見の学術的意義と保護への課題

山田文雄（森林総合研究所関西支所）

3. トゲネズミの保全に向けた地域の取り組み

河内紀浩（アージ研究会）

4. トゲネズミの生息地保護と林業のあり方

高嶋敦史（琉球大学農学部与那フィールド）

※ コメンテーター 伊澤雅子（琉球大学理学部）

※ パネリスト 千木良芳範（沖縄県立博物館）、久高将和（NPO 国頭ツーリズム協会）、澤志泰正（環境省那覇自然環境事務所）

第473回 7月4日（土）鹿児島（鹿児島大学理学部）

「深海性甲殻類ナミクダヒゲエビの生態」大富潤（鹿児島大学水産学部）

第474回 11月7日（土）佐賀（佐賀大学農学部）

「異なる生育環境と成長段階に応じたアカメガシワの被食防御戦略」山尾 僚（鹿児島連大・生物環境保全科学）

第475回 11月14日（土）宮崎（宮崎大学教育文化学部）

「人為的移入に由来するオキナワキノボリトカゲ (*Japalura polygonata*) の九州南部産2個体群の現状について」那須哲夫（宮崎大学農学部獣医学科）

第476回 11月21日（土）熊本（熊本大学理学部）

「熊本県の鳥類：生息状況とその保全」高野 茂樹（熊本大・院・自然科学）

第477回 12月5日（土）福岡（九州大学農学部）

「『先客』の存在を手がかりにしたマルハナバチの採餌行動」川口利奈（九大・院・理・生物科学）

第478回 12月12日（土）鹿児島（鹿児島大学理学部）

（同時開催 全国SSHコンソーシアム「ダイコン多様性研究」成果報告会）

共催：鹿児島大学理学部

後援：鹿児島県高等学校教育研究会理科部会

【特別講演】

「おもしろいことやってみよう！—鹿児島大学理学部インテンシブ理数教育特別プログラムの取り組み—」内海俊樹（鹿児島大学理工学研究科）

【鹿児島県高等学校理科研究会推薦課題口頭発表】

1. シダ植物の研究第2報 ～イシカゲマの発芽の仕組み・シビカナワラビの形体～

市来農芸高校生物部 田上真盛（3年）・福ヶ野勇樹（3年）・松下大輔（3年）・児島久美（1年）（指導：久保紘史郎）

2. オトシブミとその寄生蜂に関する研究2009 ～幼虫寄生蜂オトシブミコマユバチの寄生生態解明への

SSH挑戦～

錦江湾高校2年課題研究オトシブミ班

中山和也・中原悠大・岡元理依・後藤真依・川崎美由紀・西野初音・塩田春花・黒瀬菜穂（指導：小溝克己）

【ポスター発表校】

○ダイコン多様性コンソーシアム参加校

小松高等学校（石川県）、諏訪清陵高等学校（長野県）、大垣東高等学校（岐阜県）、奈良高等学校（奈良県：今回不参加）、住吉高等学校（大阪府）、日高高等学校（和歌山県）、益田高等学校（島根県）、松江東高等学校（島根県）、広島国泰寺高等学校（広島県）、松山南高等学校（愛媛県）致遠館高等学校（佐賀県）、市来農芸高等学校（鹿児島県）、国分高等学校（鹿児島県）、開邦高等学校（沖縄県）、錦江湾高等学校（鹿児島県、幹事校）

○鹿児島県高等学校理科研究会生物部会推薦課題

国分高等学校（鹿児島県）、志布志高等学校（鹿児島県）、錦江湾高等学校（鹿児島県）

○特別参加

広島国泰寺高等学校（広島県）

第479回 12月19日（土）長崎（長崎大学教育学部）

「九州南部島嶼の蘚苔類フロラとフロラ多様性」○帯金伸至・陳曉慧（きょうえ）・中西こずえ（長大・環境科学）

「熱帯産ヒルガオ科植物の海流散布と地球温暖化」○中西弘樹・楠目安由（長大・教育）

「アカエイ属の繁殖生態」○古満啓介・山口敦子（長崎大・水産）

「サトイモ科植物とタロイモシヨウジョウバエの送粉共生：特にクワズイモが送粉者に提供する報酬（餌物質）について」○高野（竹中）宏平（長大・熱研）・片桐千仞（北大・低温研）・屋富祖昌子（元・琉球大・農）・戸田正憲（北大・低温研）

「蘚苔類植生のフロラ多様性」○陳曉慧（きょうえ）・金子由紀・中西こずえ（長大・環境科学）

第480回 12月13日（日）大分（大分大学教育福祉科学部）

「大分のゲンゴロウ」内田保博（大分雄城台高等学校）

「ドジョウの研究 ～生態の謎に迫る～」三重総合高等学校 自然科学部（指導教諭：渡邊ひろ美）

「城山の保水力」佐伯鶴城高等学校 科学部（指導教諭：曾宮雅子、沢田康子）

「校庭の樹木と土壌細菌との関係について」中津北高等学校 科学部 生物班（指導教諭：高野あさみ）

「大分市裏川放水路におけるケイソウについて～ケイソウと照度の関係を探る～」大分舞鶴高等学校 科学部 生物班（指導教諭：細井利男）

(4) 地区会報 56、57号発行

お知らせ

1. 第31回（2011年）関東地区会生態学関係修士論文発表会開催のお知らせ

恒例の生態学関係修士論文発表会を、2月26日（土）

に筑波大学で開催します。この発表会は、本年度生態学関係の修士課程を修了する大学院生に、研究成果発表の機会を提供するものです。日本生態学会会員に限らずどなたでも発表できます。多くの方にご参加いただき、活気ある発表会にしたいと考えています。会員の皆様には周囲の大学院生への周知のお願いとともに、当日の御来聴を心よりお待ちしております。

発表会の詳細は、下記のウェブサイトをご覧ください。

<https://sites.google.com/site/ecologykantomaster/>

主催：生態学会関東地区会

共催：筑波大学大学院・生命環境科学研究科

日時：2011年2月26日(土) 午前～午後

会場：筑波大学 第2エリア 総合研究棟 A110,A111

つくばエクスプレス (TX)：つくば駅下車

筑波大学循環バス：つくばセンターから筑波大学

中央行き (右回り 15分)、筑波大学中央下車

筑波大へのアクセスについては以下のウェブサイトをご覧ください

http://www.tsukuba.ac.jp/access/tsukuba_access.html

筑波大の構内マップ (第二エリア 総合研究棟 A です)

http://www.tsukuba.ac.jp/access/map_central.html

問合せ：2011年関東地区生態学関係修士論文発表会実行委員会 ecology.kanto.master@gmail.com

代表：中川さやか (東大・総合文化・広域博士課程1年)

発表会詳細：

<https://sites.google.com/site/ecologykantomaster/>

2. 第14回マリンバイオテクノロジー学会大会

第14回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催予定をしております。

大会日程：平成23年5月28日(土)～29日(日)

会場：グランシップ (静岡県コンベンションアーツセンター)

大会役員：

大会会長 高野二郎 東海大学学長 理学部化学科教授

実行委員長 齋藤寛 東海大学海洋学部水産学科教授

大会事務局：

〒424-8610 静岡県静岡市清水区折戸3-20-1

東海大学海洋学部内

第14回マリンバイオテクノロジー学会大会

実行委員会

TEL: 054-334-0411 FAX: 054-334-5095

E-MAIL: marinebio14@ml.tokai-u.jp

懇親会：

開催日 5月28日(土) 18:00～20:00

場所 東海大学社会教育センター海洋科学博物館 (大水槽前)

大会の内容

1. 一般講演 (口頭発表、ポスター発表)

2. シンポジウム (一般)

* シンポジウムの企画を公募致します。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。

発表形式

1. 口頭発表：一般講演は質疑含み15分 液晶プロジェクター使用

2. ポスター発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定

一般講演のセッション

1. 微生物
2. 微細藻
3. 海藻・付着生物
4. 魚介類
5. 天然物化学・未利用資源
6. バイオミネラリーゼーション
7. マリンゲノム
8. 環境・環境適応
9. その他

発表申込みの締め切り 平成23年3月11日(金) 必着

講演要旨の締め切り 平成23年3月31日(木) 必着

事前参加登録締め切り 平成23年4月30日(土) 必着

事前参加登録費 会員5,000円 学生2,000円 非会員9,000円

非会員学生4,000円

当日参加費

会員7,000円 学生3,000円 非会員10,000円

非会員学生5,000円

※協賛いただきました団体の会員の方は、当学会会員と同等の参加費で参加できます

講演申し込み方法

発表希望者は書式に従って、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記 (連名の方全員)、演題を明記の上 web 上よりお申し込み下さい。

参加登録方法

参加登録希望者は書式に従って、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、web 上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

第14回ホームページアドレス：準備中

学会ホームページ：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>

書評

「復刻・拡大版 植物学ラテン語辞典」(2009) 豊国秀夫編 ぎょうせい ISBN:978-4-324-08862-3 価格12600円 (税込)

本書は、日本で初めて本格的な植物学で利用されるラテン語を整理する目的で作られ1987年に至文堂より出版された、タイトル通りの「植物学ラテン語辞典」の復刻版である。植物学に関するラテン語を詳述した書籍としては、英書では Botanical Latin (4th edn.) Stearn WT (1992) があるが、日本語のものでは現在でも他に類書を見ない貴重な辞典となっている。復刻にあたり、元板はA5版で字が小さく見づらかったが、B5版となり格段に見やすくなった。植物の新種を発表する時には、「国際植物命名規約」によりラテン語の記載文を伴わないと正式発表とは認められない。したがって、分類学に関連する研究上では、ラテン語の単語と文法を知ることは必須となる。ラテン語は、特に日本では、日常使われることはまずない言葉であり、とっつきにくい感もあるが、本書を読むことで決してそのようなことはないことが理

解されよう。

生態学分野においても、少なくとも講座に1冊は備えておくべき書であろう。種生物や植生に関する論文での種名で、著者は学名として書いているのだから、そのような種は地球上に存在していなかったりする。そのような間違いは、単語と文法のあやふやな記憶から来ていることが多いが、辞典を調べることで減らせるはずであり、せっかく書いた論文の価値を下げずにすむだろう。また、旧来の植物の範疇を扱っているため、菌類などの学名に使用される言葉も載っているが、むしろ、これはこれで楽しめる。

内容は、辞典部と文法部の2部構成からなり、辞典部は「ラテン語から日本語へ」と「日本語からラテン語へ」の両方を調べることが可能で、約7800語の単語が収録されている。実際に、好きな学名の中でも長めのものを選び調べてみた。「*Sanguisorba tenuifolia* Fisch. ex Link var. *alba* Trauv. et Mey.」(和名、ナガボノシロワレモコウ)は(以下は本文をそのまま引用)、「*Sanguisorba*, -ae (s.f. I) ワレモコウ属。sanguis (血液) + sorbere (吸収する)。バラ科」,「*tenuifolius*, -a, -um (adj.A) 薄い葉の (*tenuifolius*; thin-leaved)」,「*albus*, -a, -um (adj.A) 白い、白色の (white)」となっており、「血液を吸収する仲間の中で薄い葉の種だが、その中でも白色となる変種」という意味であることが分かる。実際に、ワレモコウは、古来、止血剤として利用されていたそうである。本書を用いると、これらを調べるのは一瞬であった。

文法部は、植物学におけるラテン語の書き方に重きを置き、長すぎず短すぎない分量で学名に関連した文法を適切に解説されている。見返しにある豊国さん(1992年死去)のオリジナルと思われる「植物ラテン語特徴記述簡便チャート」と「植物ラテン語記載簡便チャート」も便利で、名詞や形容詞の語尾変化等の間違いを避けることが容易となる。さらに、文法部を読むことで、このチャートの意味は、より理解される。*Betula maximowicziana* Regel (ウダイカンバ)と*Populus maximowiczii* Henry (ドロヤナギ)では、なぜ、ウダイカンバの語尾は *-ana* で、ドロヤナギは *-i* なのだろう。*Polygonum longisetum* Bruijn と *Persicaria longiseta* (Bruijn) Kitagawa はイヌタデの同種異名だが、属の見解が異なると、なぜ種小名の語尾が異なるのだろうか。それらの答えも、文法部を読むと、(自分も含めた)第二外国語が苦手であった人でも容易に理解できる。

さらに、用例が豊富であり、種子植物の属名および主要な種小名の説明もあるところがいい。本書は、辞典という性格上、値段が張るのは残念なことだが、植物学に関連する研究を行う者ばかりでなく、植物に興味ある全ての方が読むことのできるよう、少なくとも各教室や図書館に配置され、そして財布に余裕のある人の座右の書となることを望む。

(北大・院地球環境 露崎史朗)

桐谷圭治・湯川淳一編(2010)「地球温暖化と昆虫」348pp. 全国農村教育協会 本体価格4,500円 ISBN:978-4-88137-149-7

近年、地球温暖化に関する本が多数出版されている。多くの論調は、化石燃料から発生する温室効果ガスの影響によって大気や海水の温度が上昇すること、それが異常気象の増加をもたらし、人類の生活への重大な影響を警告するものである。温暖化の原因に関しては批判的な意見もあるものの、20世紀の間に地球表面の平均気温が約1℃上昇したことはほぼ確かだろう。地球は、もともと数十年の周期で暖かくなったり寒くなったりするのだが、過去30年の傾向をみると、ほぼ同じ周期を保ちながら次第にその水準が高まりつつあるように見える。そうであれば、地球温暖化が今後どの程度進むのか、そして、人類にどのような影響を及ぼすのかについて予想を立てて、来るべき危機に備えておく必要がある。

すでに地球温暖化の影響は、さまざまな場面で現れていると報道されている。学術論文でも、慎重な言い回しが多いものの、多くの論文で積雪面積の減少、異常気象や気象災害の増加、生物季節の前進、地理分布の北上などが世界各地から報告され、ほとんどが地球温暖化との関連性を指摘している。しかし、その論理構成を少し検討してみると、しっかりした根拠に基づいている論文は案外少ないことに気付く。

この本は、昆虫に限定してではあるが、温暖化が生物に与える影響を調べている我が国の研究者たちの研究成果を取りまとめたものである。それだけでも存在価値は高い。では、なぜ昆虫なのか、本書ではそれほど詳しくは説明していないが、変温動物であるため気温の影響をまともに受けて、増殖率が急激に高まる可能性があること、飛翔能力のため地理分布が急速に変化する可能性があること、羽化時期が温度依存の種が多いことなどがあげられる。その結果として、農業や林業への被害が顕著に大きくなることは十分考えられるし、病気を媒介する昆虫の侵入も想定される。また、病害虫の防除プログラムの変更を迫られることが考えられるので、詳細を把握しておくべき重要な生物群であることは間違いなく。

温暖化の生物影響を予測することは、昆虫を相手にしても容易なことではない。何が難しい問題なのか、「分布北上」を例に、少し述べる。「温暖化による生物の地理分布北上」を結論づけるには、2つのやっかいな問題をクリアする必要がある。ひとつは、分布域(特に北限)の定義、もうひとつは分布域が温度制約であることの確認である。

たとえば、フィリピン付近に生息していたチョウが台風によって運ばれて鹿児島に到着し、食草が分布していたために、しばらく繁殖が観察されたが、5年後には見られなくなったとしよう。いかにもありそうな状況であるが、この観察によって、チョウの分布が北上したと言えるだろうか。簡単な問いのように見えるが、堅実な答えを導くのは意外に難しい。どれだけ長期にチョウが定着していれば、その場所を分布域に含めるべきか、ちゃんとした決まりがないからだ。個体群が5年続けばいい

のか、10年か、それとも100年か？近年発展してきたメタ個体群の概念では、永続的な集団と時々絶滅と侵入が起きる一時的な集団の、両者の地理的な広がりや種の分布域とすることになる。このように定義すれば、鹿児島は新たに分布域に含まれることになるのだが、これまで鹿児島に分布していなかった証拠が必要になる。しかも、何年前まで遡って不在の証拠をそろえるべきかについては合意がない。生物の「北限」を決めるのは、実は容易なことではないのだ。

分布北上の原因が「温暖化」であると判断するのは、さらに難しい。温暖化以前の種の分布域が気温によって制限されていたことの確認が必要となる。物理的な障壁や気候条件、餌生物の分布、競争種や捕食者の存在など、多くの要因によって生物の分布は制限されている。地球の南北方向に注目すれば、その北側の分布境界はほぼ気候条件によって決まっている場合が多いかもしれない。ただし、そうでない場合もかなりあるので注意が必要である。

このような批判的な目で本書を通読してみたが、しっかりした論拠で書かれた章もあれば、やや怪しい章もあるというのが私の感想である。また、本書は多数の研究者による分担執筆のせい、章ごとにレベルの違いがあるのが少し気になったが、個々の章の評価はしないことにする。全体としては、研究者の現状を反映したものになっていると思う。言い換えると、温暖化影響の研究と温度影響の研究の違いがよくわからない章が多いという印象を受けた（世界的にも似たようなもの）。何が違うのか。温度の違いが生物の生理や繁殖に与える影響は、温暖化が問題になる以前から、生物学者が綿々と続けてきた研究だ。そのような研究を温暖化影響につなげるためには、新しい味付けや発想の転換が必要だ。本書を詳しく読むと、そこで苦労している著者たちの様子が想像できる。産業や人間生活への影響に焦点をあてるのが一般的だが、ほかにもいろいろな問題の扱い方が可能だろう。私の思いつきだが、たとえば、(1)生物にとって気温は重要かもしれないが、使われている気温データはほとんどが百葉箱の中で計られたものだ。地上1.5mの日陰にだけ生存している生物などいないのに、これでよいのか？(2)野外では気温は一定であるはずはないのに、「年平均気温が4℃上昇する」という言い方ばかりがはびこっている。気温の日変動や季節変動の影響を見ている研究がどれだけあるか？(3)平均気温の上昇よりも、雨量の変化や異常気象の方が重要かもしれないが、その影響はまだ誰もまともに扱えてない。もうひとつ、(4)気温を変化させて生物を飼育すれば何らかの変化はみられるに違いない。その場合の変化は気温が原因と言ってよいが、野外で生物に異常が見られた時には多くの原因が複合的に働いていることが普通だ。相関を見つけても満足しないことが肝要なのだ。本書でも温暖化の影響がいかに多様であるかが指摘されているが、まだまだ多様さの全貌は誰にも見えていないのかもしれない。

(京都大学生態学研究センター 椿 宜高)

日本ユスリカ研究会編 (2010) 「図説日本のユスリカ」
353pp. 文一総合出版 ISBN:978-8299-1172-3

日本の河川や湖沼に生息する底生動物でもっとも種数の多いグループはという問いへの答えはそれほど簡単ではないが、トビケラ（これは目レベルのグループ）と並んで種数の多いグループはユスリカ（これは科レベルのグループ）だろう。未記載種も含めると、日本産トビケラは500種を超えるが、日本から記録・記載されたユスリカはすでに約2000種と本書はいう。多くの種が小型であること、害虫でも益虫でもないこともあり、研究者は長らく少なかった。また、幼虫での分類が混乱していたためか、河川や湖沼の生態学においても、その存在や機能は軽視されてきた。水質の生物指標では汚れた水域の代表にされてきたが、それは事実だろうか。

日本のユスリカ研究は、湖沼類型学の宮地伝三郎と昆虫系統分類学の徳永雅明にはじまる。近年の本格的なユスリカ研究の再興は、医衛生学の大家である佐々学による。氏は日本ユスリカ研究会を1990年に設立して、個人研究が中心であった日本のユスリカ学において研究者の連携を促進した。この研究会は、北海道大学の岩熊敏夫、愛知医科大学の近藤繁生、信州大学の平林公男、広島大学の河合幸一郎、茨城大学の中里亮治など、佐々以外にも後進の研究者を育てる機会のあるポジションにいたベテラン、中堅の研究者も輩出してきた。また、「ユスリカの世界」(培風館)も、ユスリカの存在を陸水生態の学界に認知させた。

日本ユスリカ研究会の最新成果がこの図説である。図説といっても、一般の図鑑類とは異なり、多彩な内容を含んでいる。まず、巻頭の50ページ近いカラー図版は圧巻である。130種のユスリカ雄成虫写真は、ユスリカの多様性を十二分に教えてくれ、美麗種の多いことによって読者を驚かす。幼虫の属への検索表や白黒図版も充実している。口絵のカラー図版による幼虫口器の顕微鏡写真も幼虫分類に非常に役立つだろう。

本書の構成は、1章がユスリカ科の概説(小林貞)、2章が主要種への検索(小林貞・山本優)、3章が近年のユスリカ分類学(上野隆平・粕谷史郎)、4章がユスリカの生息環境と指標種(山本優・中里亮治・河合幸一郎・大野正彦・近藤繁生・平林公男)5章が採集・飼育法(河合幸一郎)と、第一線の日本のユスリカ研究者、陸水生態学者が執筆者に名を連ねている。ベテランと中堅の研究者による多くのコラムもユスリカの世界を再認識させてくれる。

このなかでも、もっとも充実しているのは、2章の主要種への検索である。検索だけではなく、雄成虫については属と種についてそれぞれの解説があり、形態的特徴や分類学的な問題点などが詳述されている。最新のシノニムや過去の記録の誤同定にも詳しく記述され、この二人の筆者のユスリカ分類への深い造詣がうかがわれる。種レベルの分布の記録も充実している。この章には全体の半分近いページが割かれているし、本書の価値を格段に高めている。3章は近年のユスリカ分類学として、走査型電子顕微鏡による幼虫の形態観察と、分子生物学的

手法による系統分類が解説されているが、やや物足りない。近年の多くの隠蔽種のユスリカ発見などと最新分類学との関連も、次の機会にはぜひ詳しく触れて欲しい。

2章に比べて、生態に関する4章の生息環境と指標種は、かなり物足りない。湖沼、大河、湿地、ため池などと、生息場所ごとのユスリカ相が正確に語られているが、生活様式、生活史、生息場所の知見は、2章の各種の解説に散見する記述のほうが詳しいようにも見える。せめて、“An Introduction of Aquatic Insects of North America”にあるような、生態的な特性の表はまともになかったらどうか。多様な日本のユスリカ相については、そのような生態・生活史特性の統合と解説は、この書や「ユスリカの世界」をベースにした次の段階の研究・作業になるのかもしれない。

多少の注文はつけたものの、陸水生物の研究者、技術者、学生にとっては、いずれにしても必携の書であることや類書を持たないこと、まったく疑いはない。

(大阪府立大学大学院理学系研究科 谷田一三)

石井実監修 (2010) 「日本の昆虫の衰亡と保護」北隆館 325pp. ISBN:978-4-8326-0721-7

本書は24名の昆虫学研究者が執筆した大著である。昆虫は日本には約3万種が知られているが、実際には10万種程度に達するらしい。生息環境も多様であるため、盛衰を知るとは至難である。本書では生息環境と分類群ごとに、危機の特徴を整理することによって、全体像を解明しようとしている。

本書の構成は、I. 日本の昆虫の現状と保全、II. 各種群の生息環境の保全に向けて、III. 温暖化や化学物質、外来生物などの影響と対策、IV. 参考資料からなる。

Iでは日本の昆虫全体、チョウ、クワガタムシ、トンボ、水生昆虫について現状が包括的に解説されている。冒頭の「レッドデータブックからみた日本の昆虫の衰退と危機要因」では、生物多様性国家戦略の3つの危機および温暖化との関連から、昆虫のレッドリスト掲載種の特徴をまとめている。絶滅の危機に瀕している昆虫は、すべての生息環境に及んでいる。とりわけ、河川・海浜の種や草地のチョウ、池沼性の種の危機が深刻であることは、植物と共通である。「昆虫の生物多様性の減少は、日本の自然の変貌を反映するものであるばかりでなく、他の生物群にもさらに悪影響を及ぼすことが懸念される」と結ばれている。

IIでは、昆虫各種群の生息環境の保全が扱われている。中でも、世間に実態の知られていない海浜性のハチについての解説は貴重である。砂浜海岸で記録されている有剣ハチ類は182種にもものぼる。ところが、営巣場所となる砂浜が人工護岸化によってだけでなく、侵食によって減少している。ハチ類は海浜植物の送粉者としても重要であり、海浜植物の減少とハチの減少が負の連鎖となっている。

他に、チョウ、トンボ、ゲンゴロウ、フン虫について保護に必要な森林や水辺の管理方法について書かれてい

る。生息場所の保全管理の手法が随分蓄積されてきたことはうれしい。こうした管理は特定の種あるいはグループのみを標的にしがちであるが、森林管理による影響をチョウとゴミムシで比較するなど、新しいアプローチも開かれつつある。これから生態系管理へとつながるように期待したい。

IIIでは、温暖化や化学物質、外来生物などの影響と対策について解説されている。ナガサキアゲハなど温暖化による昆虫の分布の北上は、よく知られるようになった。しかし、それだけでなく、アオクサカメムシのように、分布域への近縁種ミナミアオカメムシの侵入によって、局所絶滅するという影響が生じている。また、寄主植物との同時性のずれの影響も深刻である。シロダモに虫えいをつくるシロダモタマバエは年1化で、22-38mmに伸長した芽に産卵する。ところが温暖化によりタマバエの羽化が芽の伸長と同期しなくなり、局地的な絶滅につながる恐れもある。タマバエの絶滅は、それに寄生する寄生蜂や捕食者をはじめとする様々な種に直接、間接の影響を及ぼす。

海洋島である小笠原は、固有種が外来生物による脅威にさらされている。グリーンアノール、オオヒキガエル、ノブタ、ノヤギなど人間が持ち込んだ動植物によるものである。セイヨウミツバチの影響によると思われるハナバチの減少が見られ、父島では4種が絶滅したと考えられる。北海道では、送粉昆虫として輸入されたオオマルハナバチによって、在来マルハナバチの減少や繁殖攪乱、外来寄生生物の随伴導入などの問題が野外で確認されている。

シカによる下層植生の変化も、植食性昆虫をはじめとした昆虫を減少させている。農薬をはじめとした化学物質による影響もなくなならない。子どもの頃捕らえて遊んだタガメやゲンゴロウがいなくなり、アキアカネまでが姿を消しつつあると聞くと、この国の自然はどうなるのかと思ってしまう。

巻末にレッドリスト掲載種や砂浜で記録された有剣ハチ類などの資料が掲載されている。

(名古屋大学大学院環境学研究科 夏原由博)

岸本圭子著 (2010) 「虫をととして森をみる—熱帯雨林の昆虫の多様性」東海大学出版会 160pp. ISBN:978-4-486-01843-8

本書は、「フィールドの生物学」シリーズの第4巻として刊行されたものである。著者がここに描く物語の舞台は、故井上民二博士の情熱と強力なリーダーシップのもとに、一斉開花をはじめとする様々な生物間相互作用に関する独創的な研究成果と優れたフィールド研究者を数多く生み出してきた、熱帯林研究のまさにホットスポットの一つである。著者は今もその流れの中に身を置く若手研究者であるが、このフィールドで、長くはないと言いつつも、おそらくは相当に密度の濃い研究生活をおくってきた。このことは、本書を一読すれば容易に想像できる。本書は、簡潔に要約された学術的成果という新

鮮な素材が、若い研究者が日々直面する研究の喜びや辛さの素直な感情であっさり味付けされていて、この分野の予備知識がない人でも消化不良に陥ることなく、楽しく読み通せる一冊となっている。本書の性格からみて、各章の内容を詳しく紹介する必要はないと思われるので、ここではそれぞれ簡単に触れるにとどめる。

第1章「ボルネオの熱帯林へ」では、著者がフィールドとする東南アジア熱帯雨林の特徴や研究環境が、豊富な写真とともに要領よくまとめられており、そこからは次章以降の展開に期待を抱かせるような臨場感が伝わってくる。第2章「昆虫の長期観測」では、熱帯林研究に入り込むきっかけや、研究対象にした昆虫（ハムシ）との出会いが軽快な筆致で語られている。著者らも述べているように、章の冒頭で取りあげられた H. Wolda 博士らの熱帯林の季節性や昆虫群集の変動性に関する論文は、安定環境、変動の小さな生物群集といったそれまでのステレオタイプな熱帯林像を覆し、また、熱帯生物にとっての季節性とは何かを再考させる、大きなインパクトを与えるものであった。ここでは、著者が彼らの研究に触発され、東南アジア熱帯林において自らの仮説を検証しようと思いたち、それを実行に移していった過程がよくわかる。

第3章「林冠の世界」では、今ではよく知られるようになった一斉開花現象と、それに反応する昆虫たちの生態や動態が、生き生きと描かれている。第4章「昆虫の季節」では、再び Wolda 博士らの研究に触れ、季節性の観点から、彼らの中米熱帯林と著者らの東南アジア熱帯林における、昆虫の個体群変動パターンの異質性を論じている。第5章「早魃の影響」では、早魃（乾燥）が昆虫群集の構造に与える影響が、熱帯林における高い多様性と多種共存の機構の観点から議論されている。早魃発生前と発生後のハムシ群集の比較から、早魃が終わるとやがて種数そのものは回復するが、その中身を見てみると、通常の場合よりも顕著に種の入れ替わりが起こっていることが示されている。著者らの結果は、攪乱要因としての早魃と多様性の維持機構との関連性を見事に実証したものである。同時に著者は、いわゆる「中規模攪乱仮説」にもとづき、環境変動の影響によってこうした攪乱の頻度が増大したときの多様性への負の影響を懸念している。

第6章「フィールド研究をはじめる若者へ」は、実は著者が最も伝えたかった内容かもしれない。一つは、数々の困難な状況に突き当たっても、フィールド研究から得られるものには、それらを乗り越えるに値するものがあるということ。もう一つは、生物多様性を守るための、ある種の使命感のようなものだろうか。それは決して肩肘張ったものではなく、熱帯の多様な生きものたちに囲まれ、彼らの巧妙な生きざまを解き明かすべく格闘する日々のなかで、自然に醸成されていった感情と言えるかもしれない。パラタクソノミストに関する著者の見解や、この章の最後に出てくる「フィールドワーク」の3頁に、著者の思いが凝縮されているように感じられる。

本書からは、森林を舞台としたフィールド研究の面白さだけでなく、対象とする昆虫やそれを取り巻く様々な

生物の多様さへの率直な驚きや、昆虫たちに寄せる深い愛情の一端も垣間見ることができる。また、本編だけでなく、驚きのエピソードの数々や著者の胸のうかが素直に語られたコラム欄もまた秀逸である。本書は、片手で繰れるほどのボリュームながら、その内容は一言で言えば、フィールド研究の純粋な楽しさに満ち溢れている。著者ほどの「オラン・クワット」は男女を問わずそうそういるとは思えないが、少なくとも本書は、圧倒的な大きさと神秘に満ちた森を前に立ちつくす研究者の卵たちの背中を、きっと優しく押してくれるに違いない。

(名古屋大学大学院生命農学研究所 肘井直樹)



京都大学 生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 椿 宜高

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

共同利用・共同研究公募のお知らせ

京都大学生態学研究センターは、2010年度（平成22年度）から『生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点』として新たに発足しました。センターでは生態学の基礎研究の推進と生態学関連の共同研究の推進を目的として、共同研究や、研究集会・ワークショップなどの公募を毎年度行っています。詳しくはセンターのHP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/cooperative/index.html>) をご参照ください。

なお、2011年度の公募は、2011年1月31日で締め切りました。

協力研究員 (Affiliated Scientist) に関するお知らせとお願い

生態学研究センターでは全国共同利用研究施設として、開かれた研究活動を活発化するために、協力研究員制度を設けています。協力研究員は担当教員とご相談のうえ、施設の一部をセンター員に準じて利用できます。平成22年度3月末で任期満了の協力研究員におかれましては、これまでのご協力に対して厚く御礼申しあげます。改めて平成23・24年度の協力研究員を募集いたします。新規及び引き続き協力研究員としてセンターの共同利用を希望される場合は平成23年3月14日（月）までに申請書をご提出いただくようお願いいたします。

申請書の様式はセンターHP (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/activities/images/gs0607.doc>) からダウンロードできますので、必要事項を入力のうえ電子メールでお送りください。なお、上記締切以後の申請についても随時受け付けています。

申請書の提出先・問い合わせ先

京都大学生態学研究センター共同利用担当
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
E-mail: kyodo-riyo@ecology.kyoto-u.ac.jp
Tel: 077-549-8200 Fax: 077-549-8201

※京都大学生態学研究センター協力研究員の委嘱についての申し合わせ

- (1) 生態学研究センター（以下「センター」という）の研究活動を推進するため、学内外の研究者に協力研究員を委嘱することができる。
- (2) 協力研究員は、教授会の議に基づき、センター長が委嘱する。
- (3) 協力研究員の任期は原則として2年とする。

センター関係者の動き

- 1) 2009年度 JSPS 外国人招聘研究者の Guillaume ACHAZ 氏（フランス）が、8月23日で任期を終え、帰国されました。
- 2) 2010年度外国人研究員（客員教授）として、フランス国立科学研究センターの Fereidou RASSOULZADEGAN 氏が2010年10月1日から2011年2月28日の予定で滞在中です。
- 3) 2010年度外国人共同研究者として、フランスより Adeline Anne Jacqueline WALL 氏が2010年11月25日から2012年11月24日までの予定で滞在中です。